# 新 世界洋上紀行

## 洗練のヨットスタイルを愉しむラグジュアリーな海の旅

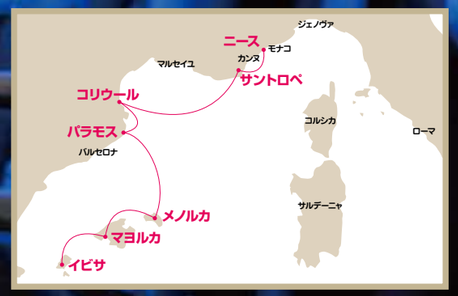
第2回

## Le Ponant（ル・ポナン）／中編

### フレンチシップ「ル・ポナン」で巡る、フランス・コートダジュールからスペイン・リゾート島周遊クルーズ

欧米のクルーズファン、とりわけパーソナルなサービスを求める人たちを虜にしてやまない「ヨットスタイル」のクルーズ。あたかも自身がそのヨットのオーナーであるかのような、上質かつハイクラスでプライベート感あふれるスモールシップでの旅。「ガストロノミックシップ（食通の船）」との異名を持つフレンチクルーズシップ「ル・ポナン」で行く、極上のリゾートクルーズはいよいよ、スペインのリゾート島へと向かう。

text: Masaaki Higashiyama
photo: Masaaki Higashiyama, Compagnie du Ponant
special thanks: Compagnie du Ponant, Mercury Travel
http://www.mercury-travel.com



パラモスからバスで1時間、フィゲラスのダリ美術館。彼の才能はキャンバスにとどまらず、家具、宝石、オブジェにまで至る。絵の中にもうひとつの絵を埋め込む技法に感嘆。

## 8月18日

ル・ポナンは国境を越え、スペイン、カタロニア地方の小さな街、パラモスの港に接岸した。

各寄港地で船会社主催のオプショナルツアーが用意されており、これがとても便利。船の前からバスが出発し、船まで送り届けてくれる。今日はパラモスで一番人気のツアー、サルバドール・ダリ美術館へ行くツアーに参加する。

車窓からの眺めは、フランスに比べるとどこか素朴。しかしスペインの日差しは白く、空から満遍なく降り注がれる感じで、とても爽快だ。1時間ほどでフィゲラスに到着。

ダリ美術館には朝早くからチケットを求める長蛇の列が出来ていた。しかしツアー参加者には事前にチケットが用意されており、すぐに入れる。

ダリは、1904年生まれ。逝去が1989年なので、近年まで意欲的に活動していた芸術家。絵だけでなく、オブジェや家具、ジュエリーのデザインも手がけるなど多才。私のような素人にも天才と思わせる作品もあれば、まったく理解不能なものもある。ときに明るく、ときに暗く、繊細だったり、大胆だったり……。自由奔放な表現者なのだと感じた。

美術館を出たところでiPhoneに電話が入る。ポナン社のパリオフィスから。週明け月曜日にミーティングをしたいので、パリへ寄って欲しいとのこと。ヨーロッパではスペインからフランスなんて、日本で例えるなら隣の県に行くぐらいの程度にしか考えていない。この一本の電話で日本への帰国便を変更することに。参ったなぁ。

美術館巡りの後、地元のスペイン料理店に入ったが、スペイン語のメニューがまったく理解できない。パエリアを頼んだら、最小2人前から、と言われ、お任せで頼んだら、オリーブオイルをふんだんにかけた野菜とアンチョビ。旅先で美味しいものを探すのはなかなか難しい。

フィゲラスからの帰路、車窓いっぱいに広がるひまわり畑を走り、夕刻ル・ポナンへ帰船。クルーが笑顔と冷たいおしぼり出で迎えてくれる。

今夜のディナーもオープンデッキで。そういえばこのシーズン、ニースなどのレストランでも外のテラス席から埋まってゆき、食事の後も遅くまで喋っている光景を見た。ル・ポナンのオープンデッキでのディナーも、よく考えればそれとまったく同じ。

今日は、ブラジル人ご夫妻がパラモスで調達してきたスペインの赤ワインが振舞われた。フルボトルのどっしりとした赤、私はメインディッシュを魚からラムに変えてもらった。その愛称は抜群。

ル・ポナンは、デザートも美味である。今時日本では「甘さ控えめ」が流行りらしいが、ル・ポナンのデザートはしっかりと甘く、それが濃い目のエスプレッソにとても合う。この船のパティシエはとても若いのだが、すばらしい腕前と斬新な発想で見た目にも素晴らしいデザートで魅了してくれる。

夜11時、闇夜の洋上にカジノが解禁。欲望渦巻くルーレット、ブラックジャックに一喜一憂する。ギャンブルにはある種独特な覚醒作用がある。どこかの誰かが大勝ちしたらしく、マムのシャンパンを取り巻き連中に振舞っている。勝ち続けて止められない人、負けを取り戻そうとして止められない人……。ギャンブルは残酷だが、はっきりと勝者と敗者に分けてゆく。

バカンスシーズン真っ只中、スペインの極上リゾート地は、海外からはもちろんのこと、北ヨーロッパ人たちが、太陽を求めてやってくる。

ディナーはオープンデッキで。今宵も地元の食材を取り入れた美食とワインの饗宴が始まる。夜11時、カジノがオープン。ルーレットに一喜一憂するギャンブラー達。

メノルカ島、マホン。港の一番奥でも10m以上の深さがある天然の良港で、海沿いには別荘とプライベートヨットが並ぶ。船から徒歩での街歩きが楽しい。

## 8月19日

地中海を南西へ、次の寄港地メノルカ島のマホンへ向け航行。マホン到着は正午の予定。デッキで日光浴と決め込む。船の上では何をしてもいいし、何もしなくてもいい。しかし日本人は、この“何もしない休日”が苦手である。せっかく旅行に来たのだから何かしないともったいない、とか、二度と来られないかもしれないのだから、とでも思うのだろうか？

フランス人のバカンスは堂に入っている。日光浴をする人、読書にふける人、今時iPadで遊んでいる人、友人とおしゃべりしている人……。そんなこと、家でも出来るじゃないか？と思う諸氏もいらっしゃると思うが、家でもできることを、わざわざ船の上ですることが、これまた贅沢なのである。私も洋上で週刊新潮を読んでいたとき、妙に贅沢な気分になったことがある。時折、タイミングよくクルーが冷たいミネラルウォーターとカットしたフルーツを持ってきてくれる。

正午前、島影が見えてきた。どうやらメノルカに着いたらしい。

メノルカの港マホンは、自然の港としては世界で2番目の深さがあり、港への入り口付近で30メートルを超えている。絵に描いたような美しいアプローチを進み、港の一番奥に接岸。ル・ポナンのすぐ前にはもうすぐ出航しようとする地元の観光船、そしてデッキには溢れんばかりの観光客。その全員がかなりの至近距離からル・ポナン洋上の我々を見ている。私はこっちの船で良かった……。

今日のランチは、シーフード。新鮮な生牡蠣にレモンを絞ってシンプルに食す。通常クルーズシップで生牡蠣を提供することはほとんどない。危ないからだ。しかし、ル・ポナンはそんなことで妥協してはいられない。なんたって船客は世界で最も味にうるさい国の人なのだから。

ランチのあと街に繰り出してみたが、ほとんどの店が閉まっている。午後1時から5時まではシエスタだった。シエスタ、お昼寝の時間、いい習慣だ。一軒だけ開いていた店で強い酸味のレモンのシャーベットをいただく。じりじりと日差しが強くなってゆく午後、この冷たいシャーベットに救われた。

日光浴をする船客に、冷たいミネラルウォーターとカットフルーツを振舞うクルー。サービスは極めてパーソナルである。

午後7時、マホンを出航。ル・ポナンはブリッジ以外にオープンデッキにも操舵設備があるのだが、そこでキャプテンはじめ上級オフィサーが操船している横で、カクテルパーティが始まる。大型船ではあり得ない。そしてオードブルとして、ハモンセラーノの大きな塊が登場。これが大人気。フランス人はどこまでも美味しいものに貪欲である。

この毎晩7時からのカクテルパーティは明日の予定についてのブリーフィングを兼ねている。明日の寄港地の見所などをスタッフが丁寧に説明してくれる。

その後のディナー、今夜も船尾のオープンデッキにセッティングされた。

ところが今晩は波長と船がうまく合わないのか、大きな横揺れが発生し、ギャレーからガッシャーンと大量の皿やグラスが割れる音が聞こえる。大丈夫なのだろうか。しかし、ウェイターは平然と熱いスープを一人ずつに注いでいく。まだ時折横揺れがあり、皿のスープも揺れている。メインディッシュにさしかかる頃、横揺れも収まり、いつもの楽しい夕べとなった。

フィリピン人バーテンダーのギルバートと、日増しによく喋るようになった。今日もキャビンに戻る前にバーカウンターに腰掛け、一杯やる。ビッグシップよりギャラは安いけど、この船での仕事はとてもハッピーであるとのこと。それでも、彼が将来もっと安定的に家族と一緒に暮らせることを願いたい。

明日からはいよいよ、旅のフィナーレ。マヨルカ島、イビザ島が待っている……。 **P.B.**

生牡蠣、シュリンプカクテルなど新鮮な地元の食材で作ったオードブル。ボナンの食のレベルは客船のそれを超越している。船客も参加してのファッションショーで大盛り上がり。

大小様々なヨットやクルーザーがマホンの港に入ってくる。世界中からここを目指してやってくる。中には驚くほど遠い国の船籍も。

とてもエレガントなフランスのご夫人。ル・ポナンの船上ではドレスコードはスマートカジュアル。こういった普段着にこそ、その人のセンスが表れる。


Profile

**東山真明**

海と船の旅をこよなく愛する、海外クルーズエージェント。大型客船よりも、プライベート感ある上質な「ヨットスタイル」のクルーズにこだわり、国内で小型船クルーズを取り扱う４社による「スモールシップアライアンス」を設立、その啓蒙に励む。マーキュリートラベル代表。

■マーキュリートラベル　TEL: 045-664-4268

http://www.mercury-travel.com